

大学生の孤独感に対する捉え方とひとりである能力が 対処行動に与える影響

岩切 悠祐¹ 田中 速²

本研究では、①孤独の際の対処行動、孤独に対する捉え方、CBA、孤独感の関連を検討し、②孤独への捉え方とCBA、孤独感がそれぞれ孤独への対処行動にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした。研究1では、孤独を感じた際の対処行動の尺度として、3種類の既存の尺度があるが、最も信頼性・妥当性が高い尺度を選ぶため、私立大学生84名に予備調査を施行した。その結果、広沢(2002)の尺度が比較的信頼性・妥当性が高かった。よって、研究2において、広沢の対処行動尺度を使用するものとした。研究2では、研究1で選定した孤独を感じた際の対処行動尺度、孤独に対する捉え方尺度、CBA尺度、UCLA孤独感尺度を用いて、私立大学生297名に質問紙調査を施行した。共分散構造分析の結果、CBAを外生変数として、孤独に対する捉え方と孤独を感じた際の対処行動に影響を与えているモデルが最も高い適合率を算出した。他に孤独感を外生変数としたモデルの算出も行ったが、CBAを外生変数としたモデルより高い適合率は算出されなかった。本研究において、孤独感はモデル上有意な変数ではなかったと考えられ、大学生の孤独に対する捉え方や孤独を感じた際の対処行動に孤独感は重要ではなかったと考察された。しかし、信頼性・妥当性や統計手法の問題についての観点、孤独感と他の要因との関係が影響し、孤独感との関連が見られなかったことも考えられるため、孤独感とは他の変数に単純に影響を与えている訳でなく、複雑な関係構造が存在する可能性が示唆された。

キーワード：孤独感、CBA、孤独に対する捉え方、孤独を感じた際の対処行動

問題と目的

人々が生活していくなかで、多くの人が時に経験する感情として孤独感がある(花井・小口, 2005)。孤独感とは、広辞苑によると「仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること」、「思うことを語ったり、心を通い合わせたりする人が一人もなく寂しいこと」とされている。落合(1999)は、孤独とは中国文学においてひとりであることを示す「孤独寡寡(こどくかなか)」の短縮形として歴史に登場している概念だと述べており、孤独感を「自分がひとりであると感じること」と定義している。花井ら(2005)は、人々が生活していくときに、ほとんどの人が経験している感情として孤独感があると記述しており、孤独感とは人の身近に常に存在する概念である。また、孤独感とは、「ひとりであること(孤独)」を感じるという主観的な感情(Loneliness)であり、逆に孤独とは、「ひとりである」という客観的な状況(Social isolation: 社会的孤立)であると考えられる。小辻(2011)は、老人の社会孤立について論じており、その研究の中において、社会孤立という状態は個人の感情とは異なるものであると記述している。

落合(1993)は、孤独感が自我の発現に伴って必然的に感じるようになるものであって、青年の抱える代表的な生活感情だと記述している。大東ら(2009)は、青年の孤独に対する捉え方を解釈していくとき、自我の発達、特に自我同一性の確立と、孤独感や孤独の体験との関連を把握することは、重要な視点だと記述している。このことから、大学生が孤独感を捉える過程は、自我の発達や自我同一性の確立といった生涯発達において重要な視点のひとつだと言える。

では、孤独は個人の捉え方に対し、どのような影響を及ぼしているのだろうか。孤独の主観的な側面、すなわち孤独の捉え方の先行研究として、大東ら(2009)の研究がある。彼らは、孤独の捉え方を「否定的評価」・「自己成長機能」・「肯定的評価」の3つに分類し、孤独感の程度や在り方がそのまま自己意識や精神的健康に影響を与えるのではなく、その前の段階として個人のもつ孤独に対する捉え方の特徴によって孤独感形成・影響を詳細に検討することが可能だと述べている。しかし、孤独感に関して、孤独を捉える前段階として、他に影響を与えている指標があるのではないかと示唆された。

孤独感に関係する研究に、次のような理論がある。Winnicott, D. W.(1985)が提唱した「ひとりである能力(Capacity to Be Alone: 以下CBA)」である。野本(2000)は、CBAを幼少期の母子関係から他者

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

2 東京成徳大学

の存在を感じられる経験をすることでひとりでも快適に過ごすことができるようになる低次CBAと、発達過程において、個別性に気づくことで自分らしい生き方を体現していく高次CBAに分類している。野本(2000)によると、孤独を意識的に捉えていない幼少期からひとりでありながら親の存在を感じる経験や、孤独不安耐性・個性に対する気づきなど発達を通して、能力として確立されていくことが述べられている。これらのことから、孤独を意識的に捉える以前から、孤独に対する能力として個人の中にCBAが確立しており、それが捉え方に影響を及ぼしていることが考えられる。

工藤ら(1983)によると、孤独感とは薬物やアルコール依存などの非適応的な行動の心理的要因のひとつとして言及されているに過ぎないと述べているが、大東ら(2009)は自尊心と孤独の捉え方を検討し、自尊心との関連を言及している。これらの先行研究のように、孤独と外的指標の関連については様々な研究が行われている。他にも孤独感を要因とした研究として以下のものがある。孤独感と社会的行動の関係性、孤独感と連合した情緒的経験の種類、孤独感と自尊心の相互関係、孤独感抑うつの概念的区分、孤独感に対する自己帰属と対処行動の様態、孤独感の永続化に寄与する要因の分析など、孤独感が人間の行動や感情反応、将来の期待、動機づけ、さらに自尊心に及ぼす影響に関する実証的体系的な研究など多く行われている(工藤・西川, 1983)。他に孤独と外的指標の関連研究として、広沢(2002)の孤独を感じた際の対処行動研究があげられる。この研究において、孤独を感じた際の対処行動として、「趣味・仕事への没頭、外出」・「憂さ晴らし」・「対人接触」・「忍耐・思索」・「情緒的逃避」・「甘え」の6因子が見られた。この6因子は孤独を感じた際の行動としてあげられているが、大学生が孤独への対処行動を行う際、孤独をどのように捉えていたか、CBAがその対処行動にどのような影響を与えているかについての先行研究は見当たらなかった。これらのことから、対象者である大学生が孤独を感じ、対処行動を行った際、孤独をどのように捉えているかという認知面と、今までの発達過程において孤独に関して習得された個人の能力面(CBA)、これらの影響の傾向によって異なる対処行動を選択する可能性も考えられた。

以上、孤独に関連する心理学的研究を概観したが、主観的な孤独に対する捉え方と、孤独への対処能力であるCBAとの間にどのような関連があるか、実証的な研究は見当たらない。また、孤独に対する捉え方やCBAが、実際の孤独感や孤独を感じた際の対処行動に影響を与えているかについても先行研究は見当たらない。よって本研究では、①孤独の際の対処行動、孤独に対する捉え方、CBA、孤独感の関連の検討し、

②孤独への捉え方とCBA、孤独感がそれぞれ孤独への対処行動にどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とする。

研究 1

1. 目的

孤独感への対処行動を測定する尺度として、先行研究によると2つの対処行動尺度がある。広沢(2002)の「対処行動に関する質問紙」と、Rokach, A.(2000)の「Coping with Loneliness」である。「対処行動に関する質問紙」では、大学生の孤独を感じた際の対処行動を測定していたが、質問項目に「クラブに行く」や「ラジオを聴く」など、行動内容として古く、現在の大学生には適さない項目が存在していた。「Coping with Loneliness」は、アメリカで作成された尺度であるため、「宗教家に自分の問題の答えを求めた」や「信仰によって自信がつき、安心した」など宗教的な質問項目が多い。また、ナイジェリアなど他文化間の相互比較研究も行われているが(Rokach, 2000)、文化による差が大きいことが述べられている。このことから、日本人に施行することが妥当であるか疑いがある。他に著者が作成した「孤独感への対処行動」(岩切, 2016)もあるが、信頼性の検討が行われておらず、対処行動尺度として適しているかは明らかではない。このようなことから、3つの尺度のうち、どの尺度を使用することが適切であるか明らかにすることが必要だと考えられた。よって、研究2において使用する孤独感を感じた際の対処行動尺度の選定のため、3つの尺度の信頼性・妥当性の比較を行うことを目的とする。

2. 方法

関東地方の私立大学の1年生から4年生までの大学生男女84名(男性29名、女性54名、性別不明1名)を対象に講義の開始後、または終了前の15分を目安として質問紙調査を行った。

質問紙は以下の構成で作成した。

- (1) Coping with Loneliness: 大学生が孤独を感じた際の対処行動を測定する尺度としてRokach, A.(2000)の「Coping with Loneliness」24項目を使用した。使用する際、著者自身による翻訳を行い、私立大学大学院教授2名の監修を受け、和訳版「孤独への対処」尺度24項目を作成した。尚、再翻訳と原著者への確認手続きは省略した。回答形式は、2件法で実施した。
- (2) 対処行動に関する質問紙: 大学生が孤独を感じた際の対処行動を測定する尺度として、広沢(2002)の「対処行動に関する質問紙」40項目を使用した。回答形式は、5件法で実施した。
- (3) 孤独への対処行動尺度: 大学生が孤独を感じた際の対処行動を測定する尺度として、著者が作成した

「孤独への対処行動」10項目を使用した。回答形式は、5件法で実施した。

- (4) 簡略版CBA尺度：上記の3つの対処行動尺度の基準関連妥当性を検討する尺度として、野本（2000）のCBA尺度の低次CBAと高次CBAのみを測定する広沢（2002）の「簡略版CBA」10項目を使用した。回答形式は、5件法で実施した。
- (5) UCLA孤独感尺度：上記の対処行動尺度と比較し、大学生の孤独感を測定する尺度として、諸井（1992）の「改訂UCLA孤独感尺度」20項目を使用した。回答形式は、4件法で実施した。

3. 結果と考察

各下位尺度得点について信頼性分析を行った。クロンバックの α 係数を計算して内的一貫性を分析した。その結果、「孤独への対処」の遠慮と拒絶が $\alpha=.53$ 、活動の活性化が $\alpha=.53$ 、自己啓発と理解が $\alpha=.52$ 、社会的支援が $\alpha=.52$ 、宗教と信仰が $\alpha=.51$ 、反発と受容が $\alpha=.52$ 、「対処行動に関する質問紙」の対人接触が $\alpha=.53$ 、メディア親和性が $\alpha=.49$ 、開き直りが $\alpha=.47$ 、甘え・消費が $\alpha=.46$ 、趣味への熱中が $\alpha=.51$ 、情緒的逃避が $\alpha=.48$ 、忍耐・待機が $\alpha=.45$ 、憂さ晴らしが $\alpha=.50$ 、「孤独への対処行動」の積極的対処行動が $\alpha=.47$ 、消極的対処行動が $\alpha=.48$ 、回避的対処行動が $\alpha=.50$ であった。

その結果、全体的にどの下位尺度も $\alpha=.8$ を超える結果は見られず、内的一貫性は低かった。しかし、研究1での調査対象者は84名と少なかったこともあり、内的一貫性が全体的に低い結果となったことの要因のひとつだと考えられる。よって、研究2において、十分なサンプルを収集することで、内的一貫性が高まるのが予測されるため、3つの対処行動尺度の使用を再度検討するものとした。

妥当性の検討

孤独感が高いほど、広沢（2002）の対人接触や忍耐・待機、Rokach,A.の活動の活性化が高まると予測し、相関分析を行った。その結果は、Table1に記載する。結果から確認されることとして、UCLA孤独感尺度といくつかの相関が見られたのは、広沢（2002）の「対処行動に関する質問紙」だった。また、孤独感と孤独を感じた際の対処行動には正の相関があることが推測されるところ、広沢の対処行動尺度の対人接触や甘え・消費は簡略版CBAの各因子やUCLA孤独感尺度の反孤独感方向表現と強い負の相関を有していた。これらのことから、Rokach, A. や岩切の対処行動尺度と比較すると、広沢の尺度が最も基準関連妥当性が高いと考察された。

よって、研究2で使用する孤独を感じた際の対処行

Table1 各因子の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
1. 反発と受容	-																						
2. 自己啓発と理解	.36**	-																					
3. 社会的支援	.49**	.17	-																				
4. 遠慮と拒絶		.14	.22*	-																			
5. 宗教と信仰		.21	.18	.17	-																		
6. 活動の活性化			-.05	.14	-																		
7. 対人接触																							
8. 憂さ晴らし																							
9. 情緒的逃避																							
10. 忍耐・待機																							
11. 甘え・消費																							
12. 開き直り																							
13. メディア親和性																							
14. 趣味への熱中																							
15. 積極的対処行動																							
16. 消極的対処行動																							
17. 回避的対処行動																							
18. 孤独不安耐性																							
19. 孤独方向表現																							
20. 反孤独方向表現																							
21. 異質感																							
22. 疎外感																							

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

動尺度として、広沢の「対処行動に関する質問紙」を使用することとする。

研究2

1. 目的

本研究では、①孤独の際の対処行動、孤独に対する捉え方、CBA、孤独感の関連の検討、②孤独への捉え方とCBA、孤独感がそれぞれ孤独への対処行動にどのような影響を及ぼしているか、を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

研究1にて比較検討を行い、最も妥当性が高かった広沢の「対処行動に関する質問紙」を、大学生が孤独を感じた際の対処行動尺度として使用し、研究1では使用しなかった孤独に対する捉え方尺度と、CBA尺度と、UCLA孤独感尺度も含めて比較検討を行う。

関東地方の私立大学3校の1年生から4年生までの大学生男女297名（男性140名、女性154名、性別不明3名）を対象に講義の開始後、または終了前の15分を目安として質問紙調査を行った。

質問紙は以下の構成で作成した。

- (1) 対処行動に関する質問紙：研究1と同様のものを使用する。
- (2) 孤独に対する捉え方尺度：大学生が孤独に対する捉え方を測定する尺度として、大東ら（2009）の「孤独に対する捉え方尺度」27項目を使用した。回答形式は、7件法で実施した。
- (3) CBA尺度：大学生のひとりでいられる能力を測定する尺度として、野本（2000）の「CBA尺度」46項目を使用した。回答形式は、5件法で実施した。
- (4) 改訂版UCLA孤独感尺度：研究1と同様のものを使用する。

3. 結果と考察

記述統計

孤独を感じた際の対処行動、孤独に対する捉え方、CBA、孤独感の下位尺度の平均値と標準偏差を算出した。結果を確認した限り、どの尺度にも偏りは見られなかった。

各因子の相関係数

孤独を感じた際の対処行動、孤独に対する捉え方、CBA、UCLA孤独感の尺度で得られた各下位尺度得点にて相関係数を算出した。その結果は、Table 2に記載する。結果から確認されることとして、対人接触と孤独不安耐性に負の相関($r=-.43$)が見られた。また、趣味への熱中と自己成長機能 ($r=.28$)、忍耐・待機と自己成長機能 ($r=.31$) に正の相関も見られた。

信頼性の検討

研究1において、信頼性分析の結果、 $\alpha=.5$ 程度しか算出されず、どの下位尺度も内の一貫性が低かった。これを踏まえ、研究2において、十分なサンプルを収集した上で、広沢の「対処行動に関する質問紙」の α 係数を再度計算した。その結果、対人接触 ($\alpha=.75$)、憂さ晴らし ($\alpha=.74$)、情緒的逃避 ($\alpha=.72$)、忍耐・待機 ($\alpha=.78$)、甘え・消費 ($\alpha=.71$)、開き直り ($\alpha=.74$)、メディア親和性 ($\alpha=.76$)、趣味への熱中 ($\alpha=.76$) が算出された。このことから、広沢の「対処行動に関する質問紙」にはある程度の内の一貫性があることが明らかになった。

各因子の共分散構造分析

孤独感、CBA、孤独に対する捉え方、孤独を感じた際の対処行動に関する各変数同士のパス解析を行った。

結果、最も高いモデル適合度を示したのはGFI=.91を示したFigure 1のモデルである。本来GFI=.95以上のモデル適合率が目安とされるが、本研究において最も高いモデル適合度が表れたため、Figure 1のモデルを使用し、以下のように解釈する。

CBAの一要因である「孤独不安耐性」と「個別性に対する気づき」は他の変数から影響されない外生変数であった。CBAは孤独に対する捉え方を經由して、対処行動に影響を与えていると解釈される。「孤独不安耐性」は否定的評価 (-.73) と自己成長機能(-.16)に負の影響を与えており、肯定的評価 (.34) に正の影響を与えていた。「個別性に対する気づき」は自己成長機能 (.66) と肯定的評価(.27)に正の影響を与えていた。否定的評価は対人接触 (.28) と忍耐・待機 (.32) に正の影響を与えていた。自己成長機能は忍耐・待機 (.19) に正の影響を与えていた。

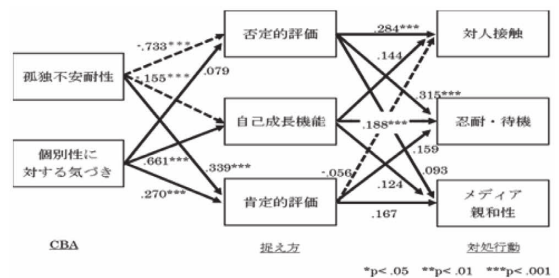


Figure1 CBAと孤独に対する捉え方・対処行動のパス図
注) 実線のパスは正の影響、破線のパスは負の影響を示す。但し、5%水準に達しないパスは省略した。

他のモデルとして、孤独感を外生変数とするモデル (Figure 2)、または孤独感が外生変数であり、CBAに影響するモデル (Figure 3) についてもパス解析を行ったが、どちらもモデル適合度はGFI=.86であり、Figure1のモデルよりも適合度は低かった。このこと

から、モデル上は孤独感が直接的に孤独に対する捉え方や孤独を感じた際の対処行動に影響を及ぼしているとはないと解釈される。

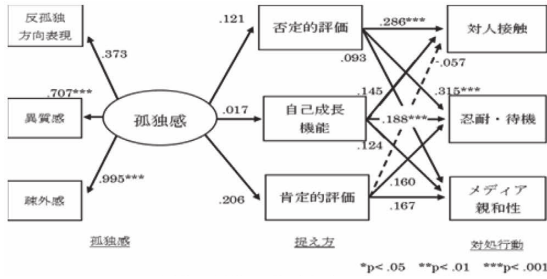


Figure2 孤独感と孤独に対する捉え方・対処行動のパス図
注) 実線のパスは正の影響、破線のパスは負の影響を示す。但し、5%水準に達しないパスは省略した。

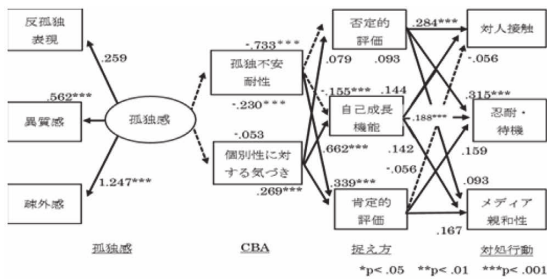


Figure3 孤独感とCBA・孤独に対する捉え方・対処行動のパス図
注) 実線のパスは正の影響、破線のパスは負の影響を示す。但し、5%水準に達しないパスは省略した。

総合考察

CBAの影響

本研究は、大学生の孤独感との関連を検討する重要な概念として、Winnicott, D. W. (1985) のCBAを取り上げている。これは、幼少期の母子関係から他者の存在を感じられる経験を通して、ひとりでも快適に過ごすことができるようになる能力だと提唱されている。WinnicottはCBAを幼少期に形成され生涯を通じて他者との関係に影響する能力(低次CBA)であると考えていた。これは精神分析学上の概念であり、Winnicottが提唱した段階では必ずしも実証的な根拠があった訳ではない。これらのことを踏まえ、本研究では孤独に対する捉え方や孤独を感じた際の対処行動に関するモデルのパス解析を行った結果、CBAは共分散構造分析という外生変数、すなわち他の変数の原因ではあるが「結果ではない」変数であることが示された。これはCBAが人生早期に形成される能力であると解釈することができる。

大学生の孤独感に関する直接的影響

「孤独に対する捉え方」、「CBA」、「対処行動」、「孤独感」の各変数の関連を説明するモデルにおいて、「孤独感」を含んだモデルでは高い適合度が算出されな

Table2 各因子の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1. 対人接触	-	.33**	.31**	.19**	.49**	.38**	-.01	.18**	.34**	.19**	-.14*	-.43**	.03	.28**	.10	-.25**	-.14*	-.02
2. 憂さ晴らし		-	.57**	.18**	.39**	.35**	.32**	.17**	.11	.12*	.13*	-.17**	.04	.04	.02	.06	.15*	.25**
3. 情緒的逃避			-	.26**	.51**	.38**	.37**	.33**	.12*	.12*	.10	-.17**	.08	.12**	.11	-.10	.11	.14*
4. 忍耐・待機				-	.31**	.20**	.21**	.29**	.12*	.31**	.08	-.24**	.26**	.02	.16**	-.11	.09	.20**
5. 甘え・消費					-	.53**	.21**	.34**	.29**	.13*	-.04	-.31**	.12*	.18**	.04	-.21**	.02	.13*
6. 開き直り						-	.23**	.33**	.14*	.19**	.03	-.14*	.17**	.27	.16**	-.20**	-.06	-.01
7. メディア親和性							-	.36**	.05	.20**	.17**	-.09	.19**	.01	.18**	.05	.09	.12*
8. 趣味への熱中								-	.08	.28**	.13*	-.12*	.23**	.12**	.25**	-.13*	.10	.13*
9. 否定的評価									-	.22**	-.45**	-.73**	-.17**	.06	.05	-.22**	.00	.12*
10. 自己成長機能										-	.34**	-.13*	.54**	.29**	.66**	-.28**	.05	.02
11. 肯定的評価											-	.35**	.52**	.00	.28**	.14*	.21**	.21**
12. 孤独不安耐性												-	.26**	.06	.03	.07	.01	-.22**
13. くつろぎと孤独欲求													-	.30**	.62**	-.24**	.13*	.08
14. つながりの感覚														-	.46**	-.53**	-.31**	-.38**
15. 個別性に対する気つき															-	-.36**	-.01	-.10
16. 反孤独方向表現																-	.29**	.37**
17. 異質感																	-	.70**
18. 疎外感																		-

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

かったため、Figure1のモデルにおいては「孤独感」は除去された。このことから、モデル上は孤独感が孤独に対する捉え方や孤独を感じた際の対処行動に影響していないことが考えられた。工藤ら(1983)は、孤独感是非適応的な行動の心理的要因のひとつであると言及しており、孤独感の人の認知や行動に影響を与えていると考えられてきた。しかし、本研究で得られた結果から直接的に孤独感が認知や行動に影響を及ぼしているわけではないことが予測された。これは、孤独を感じていると直接的に言っている人がいたとしても、その人の「孤独に対する捉え方」は孤独を感じている人と変わらないということになる。同様に、孤独に対する捉え方と同様に対処行動も変わらないということになる。これらのことを踏まえ、本研究においては大学生の孤独感重要ではないとも考えられる。

すなわち、モデル上は認知や行動に影響を及ぼしていないという結果は、従来の孤独感に関連する研究とは大きく異なる。このような結果が得られたのは以下のような説明が考えられる。まず、標本数が分析において不足している可能性が考えられる。しかし、研究2では $n=297$ と十分な標本数を獲得していたため、足りないということは考えにくい。次に対処行動の各尺度の信頼性と妥当性に問題があったことが考えられる。研究1では全体的に α 係数が低く、研究2で算出した孤独を感じた際の対処行動尺度の α 係数も $\alpha=.8$ には至らなかった。このことから、因子数の多い広沢の対処行動を用いたことに関係があるのかもしれない。3つ目に統計手法の問題が考えられる。2変数の相関においては、孤独感の一因子である反孤独方向表現と孤独を感じた際の対処行動の一因子である対人接触($r=-.25$)、甘え・消費($r=-.21$)、開き直り($r=-.20$)に有意な負の相関が見られた。孤独感の一因子である疎外感と孤独を感じた際の対処行動の一要因である憂さ晴らし($r=.25$)、忍耐・待機($r=.20$)にも有意な正の相関が見られた。このことから、2変数の相関とパス解析では異なる結果を示していることがわかる。つまり、2つの変数間では関連が見られるものの、複数の変数間では関連が消失している。これは、統計手法に由来する一種のアーチファクトであると解釈できるかもしれない。

また、孤独感と社会的孤立に関しては、Steptoe, A. (2013)の孤独感と社会的孤立が死亡率に及ぼす影響の研究がある。これは、高齢者において、社会的孤立という状態だけでなく、孤独を感じている高齢者だと死亡率が増加するというものである。この研究の結果は、孤独感が健康に関連する行動に影響を与えているというものであり、本研究における孤独感が認知や行動と関係が見られなかったという考察とは一致しない。本研究との違いとして、対象者が高齢者であることや、精神的健康度などの測定は行っていないなどの

違いはあるが、孤独感が行動に全く関係してないと断定することはできないと推測された。

孤独感の孤独に対する捉え方(認知)、孤独を感じた際の対処行動(行動)に影響していると考えられてきた。確かに2変数間の相関に注目すると孤独感と孤独に対する捉え方、孤独を感じた際の対処行動に影響を及ぼしている。しかし、CBAなど複数の因子を含む包括的なモデルを作成すると、孤独感自体が他の変数に与える影響が消失するという複雑性が窺われた。

今後の課題

上記の考察で述べたように、本研究での調査の結果は、質問紙調査に伴う技術的な制約や統計処理上の偏りによって生じたものである可能性がある。研究1において、全体的に対処行動尺度の信頼性が低かったために以後の調査結果に影響を与えたことも考えられる。更に孤独感を主観性も含め綿密に捉えるため、実際に孤独感を感じている対象者に対して精密なインタビュー調査を行うなど、他の調査手法を用いて孤独感とCBA、捉え方、対処行動の関連を調査することも必要だと考えられる。

引用文献

- Ami, Rokach. (2000) Coping with Loneliness: A Cross-Cultural Comparison *European Psychologist* 4 302-311
- 大東美穂子・岩元澄子 (2009) 青年の孤独に対する捉え方—孤独感、自己意識、精神的健康、自我同一性との関連— *久留米大学心理学研究* (8) 75-84
- 広沢俊宗 (2002) 孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、およびAlonenessへの耐性の影響 *関西学院大学社会学部紀要* 3, 81-96
- 花井友美・小口孝司 (2005). 過去の孤独感経験が現在の親和動機・社会的スキルに及ぼす効果 *実験社会心理学研究* 44, 62-70
- 岩切悠祐 (2016) 大学生の孤独感に対する対処行動の傾向 *東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科卒業論文*
- 小辻寿規 (2011) 高齢者社会的孤立問題の分析視座 *Core Ethics* 7, 110-119
- 工藤 力・西川正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— *実験社会心理学研究* 22, 99-108
- 野本美奈子 (2000) Capacity to Be Aloneの逆説性と多重性に関する研究—「一人である能力尺度」精緻化の試み— *大阪大学教育学年報* 5, 125-137
- 諸井克英 (1992) 改訂UCLA孤独感尺度の次元性の検討 *人文論集* 42 23-51

落合良行 (1999) 孤独な心 – 淋しい孤独感から明るい孤独感へ – サイエンス社
Step toe, A. (2013) Social isolation, loneliness, and all-cause mortality in older men and women

PNAS 110, 15, 5797-5801
Winnicott, D. W. (1985) “The Capacity to Be Alone”
International Journal of Psycho Analysis 39
21-31

– 2018. 1. 30受稿, 2018. 3. 2 受理 –

How does loneliness affect grasp the solitude, capacity to be alone and coping with loneliness?

Yusuke IWAKIRI (*Master Program in Psychology, Tokyo Seitoku University*)

Hayashi TANAKA (*Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this research was to examine the relationships of coping with loneliness, how to catch loneliness, CBA, and loneliness. In addition aimed to clarify the way of understanding loneliness, CBA, and loneliness affecting coping with loneliness, respectively too.

In Study 1, there are three existing measures as a measure of coping behaviors when feeling loneliness, but in order to select the most reliable and validity scale, a preliminary survey was conducted for 84 private university students. As a result, the scale of Hirose (2002) was relatively reliable and adequate. Therefore, in Study 2, Hirose's coping behavior scale was used.

In Study 2, a questionnaire survey was conducted on 297 private university students, using coping behavior scale when feeling loneliness selected in study 1, cognitive scale measure for loneliness, CBA scale, UCLA loneliness scale. As a result of analysis of covariance structure, the model which influences coping behavior when feeling loneliness and solving loneliness with CBA as an exogenous variable was calculated the highest conformity rate. We also calculated a model in which loneliness is an exogenous variable, but a higher relevance rate was not calculated than a model using CBA as an exogenous variable.

In this study, the feeling of loneliness was considered not to be a significant variable in the model, and it was considered that loneliness was not important in the understanding of college student 's loneliness and coping behaviors when feeling loneliness. However, as the relation between reliability / validity and statistical method issues, the relationship between loneliness and other factors may have influence and it may be unrelated to loneliness, the feeling of loneliness may be different from other It is not simply influencing variables but suggesting the possibility that a complicated relational structure exists.

Key words : Loneliness, Capacity to be alone, Coping with loneliness,
How to grasp the solitude

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2018, Vol. 18, pp. 79-85